

あけぼの

一人一人がありのままの自分で暮らせる社会をめざして

普段の生活の中で、例えば次のような出来事があつたとします。

ある日、家を建てている最中にとても強い風が吹き、大工が屋根から落下し重傷を負う事故が起きました。知らせを聞いたその大工の娘Aさんは大変なショックを受けました。その日の朝も、Aさんが作ったお弁当を渡しなが、来週一緒にドライブに行く約束をしたところでした。

事故からしばらくして、人づてに事故のことを聞いたBさんから「お気の毒に、しばらくはお母さんと二人で力を合わせて頑張ってるね」と言われました。Aさんは「えっ?」と不思議な顔をしました。

さて、Aさんはなぜ不思議な顔をしたのでしょうか。皆さんはどのようなことを考えますか。

実は、この大工はAさんの「母親」だったのです。

Bさんは、大工は男性の仕事であるという固定観念から、重傷を負ったのはAさんの父親であると思い込んでしまっていたのです。

私たちはこれまで生活してきた中で、Bさんのように「～だから、きっと～だろう」という捉え方を知らず知らずのうちに持たされてはいないでしょうか。そうした思い込みや偏見が、時には自分や人を生きづらくさせていることがあります。

性別や生まれ育った場所、障がいの有無、国籍などで生きにくさを感じることなく、誰もがありのままの自分で暮らせる社会をめざしていきたいですね。

今回のあけぼのでは、その思いを大切に活動している人たちの姿を通して、私たち一人一人が自分の中にある思い込みや偏見に気づき、ありのままの自分で暮らせる社会をつくるために、何ができるのかを共に考えていきたいと思ひます。

人権コラム

スポーツにおける 多様性

今年東京2020オリンピック・パラリンピックが開催されます。

皆さんは、女性選手の参加が認められたのはいつからか知っていますか。これは近代オリンピックとして再開されてから4年後の明治33(1900)年第2回パリ大会からです。それでは、全競技で女性選手の参加が可能になったのはいつからかご存知でしょうか。冬季大会では平成14(2002)年ソルトレークシティ大会から、夏季大会では平成24(2012)年ロンドン大会からでした。第1回アテネ大会から実に100年以上が経過していました。

パラリンピックでは、夏季大会は昭和35(1960)年ローマ大会が、冬季大会は昭和51(1976)年インスブルック大会が第1回大会と認定されています。しかし、オリンピックと同一の都市で開催されるようになったのは、夏季大会では昭和63(1988)年ソウル大会、冬季大会では平成4(1992)年アルベールビル大会からでした。

このように、今では当たり前と思われていることでも、変遷を重ねてきた歴史があります。

東京2020大会の大会ビジョンには、3つの基本コンセプトが掲げられていて、そのうちのひとつが「多様性と調和」です。これは、オリンピック憲章の根本原則に基づき、人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、政治、障がいの有無などあらゆる違いを互いに認め合うことで、世界中の人々が多様性と調和の重要性をあらためて認識し、共生社会を育むきっかけとなる大会にするという思いが込められています。多様な人々が参加することで「スポーツを通して心と体を鍛え、文化・国籍といったさまざまな違いを乗り越え、友情や連帯感、フェアプレーの精神を持って互いに理解し合うことで、世界のさまざまな国の人々が交流し、平和でよりよい社会を築いていこう」というオリンピック(オリンピック精神)をよりいっそう広げていける機会となるのではないのでしょうか。

オリンピック・パラリンピックをきっかけに、多様性の観点からもスポーツを考えていければと思います。